

奥田隆一先生：豪快で繊細な人

外国語学部教授

李 春 喜

奥田先生、ご退職おめでとうございます。長年にわたる教員生活、本当にお疲れさまでした。実は、私と奥田先生は、専門の領域もまったく違い、一緒にお仕事をする機会もほとんどなかったのですが、一度だけ、学部の業務で海外へご一緒したことがあります。

関西大学外国語学部の学生は、学部設立当時から、二年次に海外の提携大学へ語学留学することが卒業要件になっています。私と奥田先生は、アメリカのユタ大学担当ということで、二年ほど一緒に仕事をさせていただきました。ユタ大学に留学する学生は、ユタ大学に併設されている English Language Institute (ELI) という語学学校に所属します。

ある年、ELI の担当者と打ち合わせをする必要があり、私と奥田先生は、ユタ大学へ一緒に出張に出かけました。私は、英語教員のわりに渡航経験が乏しく、不安を感じながらの出張でした。しかし奥田先生は、海外出張に慣れていらしたご様子で、私はそのことにとっても安心したことを覚えています。私はいわゆる方向音痴で、現地の公共交通機関を使っただけの移動に不安を感じていましたので、勝手に空港でレンタカーを借りて車で移動することにしました。車なら、地図を見ながら、自分のペースで好きに移動できるからです。恐らく奥田先生は、公共交通機関を使っただけの移動に何の不安も感じておられなかったと思いますが、私が借りたレンタカーに同乗するはめになりました。いま思えば、奥田先生にとっては、地図を見ながらうろうろする私のレンタカーに同乗するほうがよっぽど不安だったと思います。

ユタ大学の担当者との交渉の際、私は英語の聞き取りやスピーキングに自信がなかったのですが、奥田先生は細かいところまで実に堂々と現地の担当者と英語で交渉されていました。奥田先生のそばに座って黙って聞いているだけの私は、「凄いなあ」と感心していました。また、先方との交渉相手は教員だけではなく、大学の寮やホームステイ先を手配する職員との交渉も含まれていました。確か、ユタ大学の寮を職掌している職員との交渉だったと思いますが、その方の話す英語がとても個性的だったため私はまったく聞き取れず、ただ黙って頷きただけだったにもかかわらず、奥田先生は、しきりに相手の方と何か話しておられました。私は「奥田先生、凄い！」と感心しながら、その横で必死にメモを取っていました。半時間ほどの交渉が終了し、奥田先生と二人きりになったとき、「先生、凄いですね！ 僕はあの人の話す英語が一言も聞き取れなかったですよ」と私が口にする、と、「俺もや！」と言って笑っておられました。それを聞いた私は、「ええ!？」と驚きましたが、それでも、奥田先生の大胆不敵な交渉ぶりにと

でも感心したことを覚えています。

話は前後しますが、ユタ大学への出張の際、飛行機の機内食を何度か食べるのですが、私は緊張のせいあまり食欲がなく、機内で出される食事をほとんど残していました。ところが横に座っておられる奥田先生は、提供される機内食をすべて平らげ、「医者からあんまり食べたらアカンて言われてんねん」と、にこにこしながらおっしゃっていました。また現地でも、ELIの職員が「せっかくですから」と、奥田先生と私をメキシコ料理店へ招待して下さいました。そのときも、メキシコ料理に慣れていない私はあまり食べることができなかったのですが、奥田先生は、食材が不明なメキシコ料理を美味しくするようにすべて平らげ、「医者からあんまり食べたらアカンて言われてんねん」とおっしゃっていました。それを聞いて私は、「食べてるじゃないですか!」と心の中で突っ込み、奥田先生にとっても好意を感じたことを覚えています。

このように奥田先生のことを紹介すると、あたかも奥田先生が、細かいことに拘泥しない豪放磊落な方だと思われるかもしれませんが、実は奥田先生は、とても細やかな気遣いをされる方でもあります。私は、2020年の秋学期を健康上の理由で休職したのですが、そのとき、たった一人お見舞いのメールを下されたのが奥田先生でした。その年度は、COVID-19の影響で、春学期は全面オンライン、秋学期も対面授業とオンラインの組み合わせという異例の年度で、復職後の授業運営に私は大変不安を感じていました。そんな私に、奥田先生だけは「心配せずゆっくり休養して下さい」と心のこもったメールを下されたのでした。

このように、堂々とした体軀からは想像し難いことかもしれませんが、奥田先生のあの大きな身体には実に繊細な心が宿っています。そしてそれは、先生の学問的な業績や学生との接し方に自然と滲み出ていたに違いありません。

奥田先生がご退職されたあとの外国語学部は本当に寂しくなりますが、先生にはお身体に気をつけて、いつまでもお元気でいらしていただきたいと思います。そして度々キャンパスに足を運んでいただいて、これからも、「医者からあんまり食べたらアカンて言われてんねん」という言葉を聞くことを楽しみにしています。私も、大学教員としての生活がそんなに長く残っているわけではありませんが、奥田先生のように、豪放快活で、かつ繊細な心遣いを併せ持った教員になれるよう精進したいと思います。奥田先生、本当に長い間お疲れさまでした。